

利休の最後

豊臣秀吉は下賤よりおこつて、ついに天下をとり、今は聚楽の邸に栄華を極めた生活をしている。その頃のことであった。

彼は一日、南禅寺に遊んだことがある。

時は春のまつ盛り、桜花は乱れて雪のように散る。

静かに行列が進んで黒谷をすぎる。

ちやうどその時一人の婦人が、下僕をつれて、これもまた同じく花を賞している。

前駆伝呼の聲が

「下におれ！ 下におれ！」とあたりを払う。

さつきの婦人はおどろいて花の蔭にかくれた。

関白は輿の中からちらつと見た。

花によりそう美人の姿、容姿艶麗、花か人か、そもまた美の精か、ぼうと眼さえま

ぶしくて見られない様である。魂まで奪われた関白の顔が思われる。

「あれは一体誰の女ぞ」

関白は家来に問わせるとその僕は答へた。

「茶の宗匠、利休の女で御座います。近頃夫を失つて孤棲をしているものでございます。」

秀吉の心は動いた。何時も出入する利休の女か、かてて加えて、近頃夫を失つて淋う暮す！ 益々以つて都合がよい。すぐに輿にのせてつれ帰ることにしよう。そう！ 思つた関白は親切丁寧に口説きはじめた。しかし女は、きっぱり断つて言つた。

「御親切は誠に有難うございます。しかし私は近頃、良人を失い、寡居の寂しくも、毎日毎夜ただ泣いている者でございます。どうして関白のお側で御仕へ致すことが出来ましょう。」

きつぱり痛快にはねつめた。我がものと思ひ切つていた関白秀吉の自信は裏切られた。彼はこれがために魂をうばわれて、茫々然として歸つた。

しかしこの事件はこれで解決がついたのではなかつた。たちまちその父利休の頭の上に弾圧が下つた。

女を求められた利休は、

「苛くも女の意志をまげて関白の意に従わせたならば、利休は娘を売つて名利をむさぼる者だというであろう。茶道はそのまゝ道である。世の俗塵を超越したる茶道の宗匠と言われる者が、金儲けのために娘を売つたと言われたならば、一代の恥辱である。たとえ関白の命とあつても応ずるわけにはゆかぬ。」

彼は固く辞退して従わない。

秀吉の心は快々として楽まない。しかしこれを如何ともすることは出来ない。

しかしかうした事があつた時、御機嫌取りがあらわれ、

「関白よ、利休はまことに不都合の奴でございます。彼は自分の像を刻んで、それを大徳寺の山門の上に置いたそうでございます。」

これを聞いて、甘言で失敗し、威圧、高圧で失敗した秀吉の心には怒の炎は燃え上った。

「何だ！ 大徳寺の山門に………ウーン、悪き奴！ 大徳寺の山門は、一天万乗の天子もお通り遊ばし、諸の身分高き公卿たちもお通り遊ばすぞ、然るに何事ぞ、茶坊主の分際で、自分の木像を山門の上におくとは、容赦は相成らぬぞ！ 無礼者奴が、今に見ておれー」

怒っている時、更に油をさしたものがあつた。

「彼、利休は公の茶道具を盗んで我物としています。」

関白の怒りは心頭に徹した。そうなつた時は、もう理非曲直はわからない。人を遣わして死を賜うた。我儘勝手、追従悪口、間違つた断定、死刑宣告、随分のまちがいである。

その死刑宣告の特使が行つた時、利休は弟子の宗厳と一緒に一室に茶をたてていた。

「その方、利休、不都合の数々により、関白秀吉公の御下命、死を賜つたぞ、覚悟召されい！」

利休は驚いた様子さええない。会釈したままで茶儀を静かにつづけた。静かに茶がすむと、彼は起ちあがつて、茶器その他の道具を、親しい人々へ記念に分ち、乱れた様子もなく、思い残すともないものゝように従容として切腹してはてた。

克己至難

天下を策略と智謀とで得ることが出来、天下の英雄に勝つことが出来た太閤も、遂に一婦人の誘惑に克つことが出来なかつた。

更に彼の劣情と忿怒とに克つことが出来なかつた。

克己することは至難である。

けれども克己の上に築かれた事業だけが永遠である。

花影の美人

花のはらく散るところ

そこに容姿艶麗の美人たつ。

関白秀吉ならずとも、男子の痴情をそそるに充分である。

甘言、誘惑の手のびる。

断乎としてはねつけた所、一種の痛快をおぼえる。

栄華の門は開かれた。

しかし日夜忘れることの出来ない亡夫のみ霊を欺き得るか。

権勢の手のびる、しかしそれに服従するか否かは自由である。

か弱き一婦人とあなどつた関白の茫々然たる醜態、

畢竟彼も一個の凡夫である。

その意を奪うべからず

匹夫もその意を奪うべからず
生活の価値は絶対である。
何もものもそれを蹂躪することを許さない。
意志は永久に自由である。

関白の権勢を以つて、なお一婦人をどうすることも出来ぬ。
生活の権威は自由意志によつて支えられる。
権勢、金力、はては暴力をもつて、その意志を奪おうとする。
罪悪がそこに生れる。
自由意志の上に立つて動かねば匹夫といえども、また英雄である。
必然の徳であり、至高の善である。

勝敗

関白秀吉は形の上では利休に勝つた。
死刑を宣告せられるも、静かにその弟子と茶を点じて従容たるどころ、彼は太閤よりも強かつた。
功利主義を棄て、毀誉褒貶を超越し、生死すらこえて、彼が彼の意志に忠実なる限り、彼には永遠に敗北はあり得ない。

魔手

運命の青い魔の手、それが花見る日にも、頭上にあらわれる。
強者となるか、弱者となるか。
それは汝に与えられた謎である。
勝つか、まけるか、汝の自由である。
結果を思わず、死すら覚悟して道に生きる者は真の英雄である。
心霊の英雄の前には、如何なる毒牙も永久に無力である。
汝にこの英雄たるの覚悟ありや。

真愛

我が娘の正しい生活、意志の自由を尊重するためには、死を賜うも敢て辞せぬところに親の真愛がある。
便宜と、勝手と、盲愛のために、親の無理を強いて、それを聞くか聞かぬかによつて、親不孝を決定しようとする、世の無智なる親には、利休の心事はわからない。

諂偽

心の卑しい男がおる。御気嫌をとるために、他人を死にまで陥れるようなことを告げる。如何なる世界にもこうした小人がいる。お側にこの巧言令色にして魂の腐つた家来を使い、政治をあやまつた者いくばくぞ。
関白の怒りにつけこんで、更に油をさし、ひそかに機嫌をとり得たと思う心事、唾棄すべきである。

無実の罪、泣いて見た者にだけ、無念に燃ゆる利休の心事がわかる。彼とても人である。

腹だつ心は誰にもある。

その時、静かに恥じる心、反省の世界だけにほんとの道がささやかれる。

因果の小車

利休の女に茫々然たりし心、すぐ淀君を求めた心である。

淀君は彼によつて亡ばされたる浅井氏の女であつた。

秀頼の一命も絶対であれば、利休の一命も絶対である。

克己を知らずして女色に溺れ、怒りにまかせて利休を殺す心事、

即ち大阪城没落の大因である。

大阪城の没落、否、天下をあげて謝するも、利休一人を殺した罪をまぬがれることは出来ない。

己に出でたるものは己にかえる。

茶道

利休は茶道の達人であり、その創始者である。

魂をこめた以上、茶道の中にも天地を封じ込めた尊厳さがある。

芸術の幽玄ふかきせかいに生き、神秘の清風に乗托す。

現時の茶儀、単なる骨董いじりでなければ幸である。